

朔北に

(昭和四十六年寮歌)

伊藤正朗君 作歌・作曲

一

朔北に手稲風の咆哮絶えて
静寂に痛し遠汽笛
凍てつく雪原に寒月の
蒼き光の射しそえば
聳天樹の影は猛くして
虚空指す彼方宿り舎の
灯は今宵また旅人の
継ぎ培いし迪を諭せり

二

朝焼けて南に風の起つ聞かば
北の都に春近く
雪融け水の溢れては
豊水の岸塵高し
黄ばむ空ゆく鳥もなく
土の香ぞする野幌路を
孤りそぞろに辿る日は
異郷の旅を思い侘ぶかな

三

はろばろと続く沃野の玉葱畠
金に輝く北指して
延びる鉄路の傍に
かの石狩の文学碑
濁れる川に臨みては
沈む夏陽に涙する
回顧百年忘れずや
この地拓きし先人の夢